

仏教唯識学の著作も残した明末の医学者王肯堂の父親王樵は、「仏道両教を誠実に究めない者に、朱子による異端批判の正しさは了解できない」と述べて『楞嚴経』の要点を筈記にまとめ、かつ『老子』の注釈を著した。また隆万期の文壇領袖である王世貞に師事した胡応麟は、「釈老二氏の言葉は、有無さだかならぬ「幻」であろうとなかろうと、みな博聞の資助である」と断じ、探索の成果をその編著『少室山房筆叢』に披露した。

仏経道典の真摯な閲読により異端の異端性を解明しようとした王樵、一方その学識を拡充すべく方外の書も渉獵した胡応麟、かれらのような学者の活動が色を添えることで、明末における三教交渉の世界は独自の活況を呈した。本報告は、そうした世界が現出した経緯の明確化を意図し、明代の知識人における仏経道典読誦の事例を通時的に紹介しながらその学術的思想史的背景を考察する。

荒木見悟先生によれば「明末の三教一致論は、三教成立以前の一心に拠点を置く心学的自覚の徴標」であり、そこで先生は、「心学を基盤とし、三教それぞれの既成体系にとらわれず、むしろそれをなしくずしにしつつ、自家薬籠中のものとして操作按配する三教一致論の続出は、まさに明末の特異な現象である」と総括するなか、管志道など明末人士の三教思想に鋭利な分析を加えられた。もちろん先生は、明末期の思想状況全体を見渡したうえで、あえてそのまなざしを「心学の源底」に向けたわけだが、本報告は、そうした根底と表層全体との関連性の析出ないし距離感の測定にも意を注ぐ。

上述の胡応麟は、書籍の購入が容易になり、「釈蔵は金陵に道蔵は句曲に、それぞれ数百金を献納すればすぐさま家蔵のものとなった」と語る。注釈を要する証言であり、その注釈に盛り込まれるべき内容、すなわち一大蔵経の繙読やその弘通の歴史ひいては方冊大蔵経の出版事業が及ぼした影響などをも視野に収め、報告を行うとしたい。(要旨 795 字)